

庶民社会から見る中国

—2期目を前にした習近平体制

ジャーナリスト 加藤隆則



昨年米国で出版された『習近平時代』(THE XIJINPING ERA)が5月から、中国共産党の中央党校機関紙『学習時報』で分割転載されている。習近平政権はまだ1期目ながら、一時代を築いたかのような書籍タイトルは驚きだ。

だが、高位高官を容赦なく摘発する反腐敗キャンペーンや毛沢東時代を思わせる集権体制、「論語」の再読を薦める伝統文化重視、さらには自分のアニメキャラクターを登場させたネットPR戦略と、過去にない政治スタイルが話題を集めているのは確かだ。これらをまとめて「習近平現象」と呼ぶことにする。

現象の真ん中にあるのは「信仰の危機」「信仰の不在」だ。中国における「信仰」は宗教にとどまらず、信念や心のよりどころ

ころといった幅広い概念を持つ。社会の信仰が揺らぎ、真空地帯ができている。それを埋めようとする様々な事象が習近平現象である、というのが私の理解だ。以下、中国で体感した具体的な事例から話してみたい。

2005年以降、特派員として中国に10年間滞在したが、ほぼ毎年、春節(旧正月)の大晦日は上海の知人宅で過ごした。昨年帰国したが、今年の大晦日もまた慣例通り上海の知人宅に出かけた。2月8日から1週間続いた春節は、習近平現象を象徴する3つの社会的事件があった。

一つは、上海市が都市部(外環線内)の花火、爆竹禁止令を徹底させ、物音ひとつしない春節が実現したことだ。反腐敗と大気汚染の影響による全国的な自粛

ムードが追い風となった。

上海は昨年、外滩(バンド)でのカウントダウン・イベントで36人圧死する事件が起きた。第19回党大会を来年に控え、治安維持が重要な政治課題となっていたこともある。上海市トップの韓正同市党書記は中央国家安全委員会を主宰する習近平総書記にメンツを与え、一定の信任を得たことになる。裏を返せば習近平の権威の高まりが示されたのだ。権力闘争の面からみれば、習近平が江沢民元総書記の牙城である上海を掌握した象徴的な意味を持つ。

もう一つの事件は、大みそかに放映される国営中央テレビ(CCTV)の恒例歌番組・春節聯歡会(春晚)が、国慶節軍事パレードの再現や「共産党がなければ



龍華寺の初詣風景（2016年2月8日）

ば新中国もない」などの革命歌（紅歌）で占められ、政治色に塗りつぶされたことだ。総監督が「100%の出来」と自画自賛したが、ネット言論は「史上最悪の番組」と酷評した。「春晚」の不人気は、社会の脱政治化現象を物語る。習近平が思想イデオロギー統制を強化していることの動機がここに隠されている。

政治的都合で娯楽を奪われた庶民は、

寺院などへの初詣に殺到する一方、ネット空間に流れた。そこで、都市女性と農村男性との別れ話が暇つぶしのネタとなり、官民入り乱れて議論が噴出した。これが以下に詳述する3つめの事件である。事件は上海に住む28歳の女性が目立たない交流サイトに書き込んだ個人的な体験から始まった。タイトルは「別れなくなった」だ。

「私は真正銘の上海人。1988年生まれ、外見は普通、外資系企業の人事部門で働いている。父は国有企業に勤め、すでに定年退職。母は小学校の先生、あと2年で定年。家庭は中流（小康）レベル……」

こんな書き出しから、彼女は、江西省出身の男性と付き合って1年だが、彼女の実家が貧乏でマイホームを買う余裕がなく、両親が結婚に反対していると打ち明けた。中国では結婚に際し男性側が家を用意するのが慣例だ。北京、上海の不動産価格はすでに東京並みで、若者だけでは買えないため両親が面倒をみることになる。

続けて彼女は春節、恋人の強い要望で初めて彼女の実家を訪れた話をした。

「行かなければわからなかった。行っ

てびっくりした」

彼女が驚いたのは、彼女の実家がある江西省の駅から実家までまずバスに乗り、その後、「トラクターのような車に乗って、あまりに揺れるので酔ってしまいうほどだった」こと。そして大みそかのご馳走として出てきた食事の写真を載せ、「見ただけで吐きそうになった。想像していたものより100倍以上ひどく、とても受け入れられなかった」と遠慮なく不満をぶちまけた。彼女は、いろいろの黒ずんだ料理が並ぶ食卓の写真もアップした。

先進国並みの都会で何不自由なく育った一人娘には、全く別世界だったのだろう。彼女は恋人との別れを決意し、家族に連絡を取って迎えに来てもらった、と締め括った。

退屈していたネット空間は爆発的な反応をした。他人のメンツを顧みない身勝手な上海女性には当然、道徳的な批判が集まった。一方、社会の格差、地域間の格差が背景にあり、一個人を道徳的に責めても意味がないとする擁護論も出た。

「早く気付いてよかった」「門当戸対（家柄の釣り合った男女）は大事だ」との同情も少なくなかった。

大きな社会的反響を受け、春節6日目の2月13日、党中央機関紙『人民日報』の評論員が公式の携帯アプリ・微信(ウィー・チャット)で「農村、あなたを愛することは非常に重い」と題する一文を発表した。格差社会の改善は多くの時間を要するとし、「思いやりの心」で相手に接することを説いた。だが空疎な説教は何の効果もなく、かえって火に油を注いだ。

最も目を引いたのが東北地方出身の『財經』誌記者が書いた春節の帰省日記「病状が悪化した東北の村」だ。老人を重んじる伝統的道德が崩壊し、とばくが横行して風紀が乱れ、農村社会が崩壊の危機に直面していることを暴露した。都市が砂漠のように荒廃している一方、農村もまた家族団らんの愛を失い、重篤な精神の病に侵されてるというのだ。農村で孤独な老人の自殺が増えていることを指摘する書き込みもあった。

結局、宣伝当局が上海女性の別れ話はデマだと批判し、一応の幕引きが図られた。CCTVの公式サイトは、習近平が世論工作座談会で述べたばかりの「真実性はニュースの生命だ」との発言を錦の御旗にして、デマはネット管理法規に違反し、大衆の気持ちに無駄に消費し、農村を傷つけたと厳しく断罪した。

だが、どの中国人に聞いても「本当かウソかは問題ではない」と答えが返ってくる。家族友人が集う年に一度のお祝いに、都市と農村の格差をめぐって社会を総動員する騒ぎの起きたことが問題なのだ。かりにデマであっても、自分たちの生活に無関係で、荒唐無稽な話であればだれも相手にしない。真実だと受け入れられる土壌が広範に存在していなければ、これほどの騒ぎにはならない。

知り合いの中国社会科学者がこんな分析をする。

「農村が素朴さや温かさを失わず、貧しくとも明るさを持っていれば、上海女性逃げ出す話にそれほど話題性はない。農村は伝統的に理想郷だった。騒ぎの背景には、農村の荒廃を生んだ社会全体の信仰の危機がある」

すでに述べたように、中国における「信仰」は信念や心のよりどころといった幅広い概念だ。古代から中国の農村は、官界の政争に敗れた知識人、文化人が名声や富貴とは異なる価値、新たな信仰を求めて羽を休める桃源郷だった。土地と自然、庶民に根差した文化を醸成する懐の深さがあった。

「田園詩人」と評される詩人の陶淵明

は、飢えをしのぐため自らを曲げて仕官する生活を捨て、田畑で鋤を振るう清貧の道を選んだ。『帰園田居』に次の句がある。

久しく樊籠(はんろう＝鳥かご)の裏(うち)に在りしも、復(また)自然に返るを得たり。

窮屈な都会から逃れ、自然の生活に信仰を採し当てた安心の境地である。農村が持つ精神の浄化作用がなければ、中唐の白居易、北宋の蘇東坡もまた生まれていない。だが都市が農村を飲み込み、「金と権力がすべて」とする功利主義に支配される中で、こうした境地はますます失われている。

農村の疲弊を伝えるニュースは続いた。4月下旬、中国の国営新華社通信が、中国北西部・甘肅省の「1人の農村」を紹介する記事を配信した。場所はシルクロードの要所として知られる省都の蘭州市から150キロ離れた靖遠県永新郷松柏村雪山社。唯一の村民は男性の劉生家だ。年齢の記述はないが、写真を見る限り50歳前後だろう。

報道によると、2006年、二十数戸あった村民が次々移住を始めたが、劉生家は病気の母と弟を介護するため残った。

その後、母も弟も亡くなり、気が付くと1人になっていた。周囲は朽ちかけた塙や壁が残骸のように残る。風雨にさらされ、黄土の塊と化している。

「最初は山奥で犬の鳴き声があると一晩中眠れないこともあったが、羊を何匹か飼い始めてとりあえずの仲間ができ、1人の生活に慣れていった」

劉生家はこう話す。4年前、自宅の壁が雨で壊れたので他人の空き家に住み替えた。食料は何キロも山を下り買い出しをする。生活補助に毎年2、3匹羊を売り、森林の臨時保護員の手当てを含め毎月の収入は700元(約1万2000円)。「親戚の援助もあるので食べていくのに問題ないが、やはり人のいる場所に引越したい」という。

日に焼けた浅黒い顔、鷲鼻でえらが張り、しっかり口をつぐんだ正面写真は、寡黙で忍耐強い農民の姿を伝える。だが彼がどんなに屈強な精神の持ち主だろうと、村がいずれ消滅するのは目に見えている。

甘粛省は1人当たりGDPが2万6000元(約44万円)と全国で最も低く、北京、上海などの4分の1しかない最貧困地区だ。劉生家の年収は8000元を

超えるので、貧困層ラインの年収2800元以下には含まれない。だが中国農村の惨状は数値では計り知れない。約9万人の死者・行方不明者を出した2008年の四川大地震で、被災地となった甘粛省文県の山間部を現地取材したときのことを思い出す。普段でも雨による土砂崩れでしばしば狭い山道が封鎖される僻地だ。交通の不便に加え、発生当初、地元政府が被害を過小評価しようと報道規制を敷いたため実態把握が遅れ、中国メディアが「忘れられた被災地」と報じていた。幹線道路では山から下りてきた村人が段ボールの紙を掲げ、「この奥に被災した村がある」と助けを求める光景にも出くわした。

文県のある山村では材木を土で固めただけの家屋が大半を占め、崩れた土塙は雨で流され跡形もなかった。だが人民解放軍が投入され道路が切り開かれると、村民から「震災のおかげでようやく広い道路ができた」と喜ぶ声が聞かれた。救援物資に白米があったことも、めったに口にできない人々には歓迎された。震災を上回る貧困が存在していたことに啞然とさせられた。

「小康であるかどうかは農民を見なけ

ればならない」

習近平はこう語って農村重視の姿勢を強調する。「小康」とは飢餓を脱しゆとりある生活を実現した状態を指す。鄧小平が1979年、日本の大平首相に20世紀末までの目標として語ったのが最初とされる。先進国入りをする前段の社会だ。中国共産党は農村に拠点を築き農民を組織することで、国民党が支配する都市を包囲して政権を奪取した。毛沢東が「中国人は国家の主人になった」と建国を宣言した時、「主人」は人口の8割を占める農民を指したが、70年後の今、彼らは最も虐げられた存在に転落した。習近平が足しげく農村に足を運んでいるのは、毛沢東らが築いた農村拠点の再構築にはかならない。

中国政府は「1978年から2010年までの間に2億5000万人が貧困を脱した。国際的な基準では6億6000万人の貧困脱出に相当する」とアピールする。米マイクロソフト創業者のビル・ゲイツも2013年、海南省ボアオでのアジアフォーラムでこの数字に触れ、「人類の歴史で最も偉大なこと」と絶賛した。

習近平は建党100年(2021年)に全面的な小康社会を実現するため、2020年までにGDPと1人当たりの収

入を2010年の倍に増やす方針を打ち出している。2020年までに7000万人に及ぶ貧困層を解消することも公約に掲げている。農村の荒廃は政権の屋台骨を揺るがす問題だが、収入増だけで解決できるほど単純ではないのも事実だ。

出稼ぎ労働の流出で、農村に取り残された「留守老人」「留守婦女」「留守児童」はそれぞれ5000万人前後いるとされ、犯罪や困窮にさらされる社会問題が深刻化している。日本では北京のスモッグばかりが報じられるが、中国の環境問題は農村部の地下水や河川の汚染のほうがより深刻だ。耕作地の19・4%が汚染されているとの政府報告もある。

2011年、中国の都市人口が6億9000万人と全人口の51・27%に達し、農村人口を超えたことが歴史的ニュースとなった。1970年代末、改革開放がスタートした当初の都市化率は2割弱。わずか30年間で都市人口が倍以上に膨張したことを物語る。2011年以降も都市人口は毎年2000万人近く増加し、2020年には都市化率が60%に達する勢いだ。

貧困からの脱却は急速な都市化と並行して実現されたが、一方、大きなゆがみ

を生んだ。政府統計によると、中国の農村（自然村）は2000年からの10年間で360万から270万に減少。毎日250の集落が消滅したことになる。行政単位としての村も70万から60万に減った。甘粛省で1人残された男性のニュースは、こうした大きなゆがみの中の一現象に過ぎない。留意すべきは、中国において都市人口と都市戸籍人口は別の概念であることだ。

人口の移動を規制する旧来の戸籍制度によって、都市と農村は分断され、出稼ぎ農民は都市戸籍が容易に取得できず、教育や就業、社会保障などで有形無形の差別を受ける。戸籍人口による都市化率は36%で、生活水準が同程度の発展途上国レベルにも達していない。2020年にはそれを45%へ引き上げる計画だが、なお都市住民として認知されない「二等市民」が15%残る。

農村から逃げ出した上海女性の話は、格差の元凶である戸籍問題がいかに深刻かを物語る。社会が階層化し、バラバラになってしまっただけで、共同体としてのアイデンティティを基礎とする信仰を生む土壌は育たない。

静寂に包まれた上海の春節は、寺院に

初詣客があふれた。花火や爆竹は魔よけや商売繁盛祈願のためで、庶民の生活と密接につながっている。根を断つことはできない。

春節初日の2月8日、上海市内最大の龍華寺に行くと、100元（約1700円）の入場切符を買うのに2時間待たされた。長蛇の列が乱れないよう武装警察が人垣を作る厳戒だ。春節恒例の縁日が立つ北京の地壇公園にも行ったが、身動きが取れないほどの人出で、担架で運ばれるお年寄りが出るほどだった。

全国に広がる神頼みの現象は、人々の心が荒廃し、信仰が不在となっている現状を物語る。中国に信頼できる宗教人口統計はないが、都市でも農村でもキリスト教信者が増えていることは常識だ。伝統的な大家族が崩壊し、官僚腐敗に象徴される拝金主義が横行し、公正を実現する法治社会の建設も立ち遅れている。

「金と権力しか頼ることができない」。これが現実だ。

かつては毛沢東の掲げる社会主義の理想が、洗脳システムの中で信仰の対象になり得たが、政治闘争による混乱が庶民の政治忌避を招いた。儒教をはじめとする伝統文化や宗教を破壊した文化大革命期は、子が親を生徒が教師をつるし上げ

ることが日常茶飯となり、人心の荒廃は極まった。その反省から経済建設に比重を移した鄧小平の改革・開放政策は、押さえられていた物欲を一気に解放し、不公正な市場とあいまって、金と権力がすべてという社会風潮を生んだ。

貧しい農村は出稼ぎをしなければ生活が成り立たず、都市へ人口が流出している。都市住民と農民の流動性が逆に価値観の衝突を深めている構図がある。信仰を支えていた最小単位の家族が急速に崩れ始め、農村が荒廃し、それに代わる新たなコミュニティも出来上がっていない。頼るべき価値観を求めながらさまよい、信仰が大きく揺さぶられているのである。鄧小平は89歳を迎えた1993年9月16日、実弟の鄧墾（元湖北省副省長）にこう語った。

「我々は両極化を防がなくてはならないが、実際、両極化は自然に現れてくる。一部の人が多くの富を得て、大多数の人に行き渡らず、こうして発展していけばいつか必ず問題が起きる。今思うに、発展した後の問題は発展前より少ないとは言えない」（『鄧小平年譜』）

鄧小平は、一部の地区が先に発展し遅れた地区を牽引する「先富論」によって、両極分化のない共同富裕に到達する構想

を描いた。悪しき平等主義を突破した重大な決断だったが、先に豊かになった者は容易に既得権益を手放さないという人間の本能を過小評価したのだ。

信仰の揺らぎは党内においても深刻な問題となっている。共産党はマルクス主義宗教観、つまり無神論の立場に立つので、入党の際は「共産主義以外は信仰しない」と誓約しなければならない。だが1970年代末以降、改革・開放政策の経済至上主義が脱イデオロギー色を強めたところへ、旧ソ連・東欧の崩壊によって社会主義イデオロギーが一気に衰えた。信仰の隙間を埋めるように拝金主義がはびこり、腐敗が横行した。

胡錦濤から習近平政権に移行する1年前の2011年12月、党中央理論誌『求是』に「共産党員は宗教を信仰してはならない」と題する一文が掲載された。筆者は長年宗教問題を統括してきた中央統一戦線工作部の朱維群副部長。「近年、党員が宗教活動にかかわり、宗教界の人物と密接な関係を結ぶ現象が多くみられるようになってきている」現状に警鐘を鳴らし、「共産党員が宗教を信仰してならないのは、党の一貫した基本原則であり、それは微塵も揺らいだことがない」とく

ぎを刺した。翌年、党の建党91周年記念フィルムのタイトルは『信仰』と名付けられた。信仰の不在は、習近平が進める反腐敗キャンペーンにも表れている。

4月下旬、國務院台湾弁公室の元副主任、龔清概が規律違反で摘発された理由に、経済問題のほか「長期間にわたる迷信活動」が加えられた。同内容の規律違反は、昨年末以来、寧夏回族自治区副主席の白雪山らに次いで4人目だ。習近平は、党中央に服従する規律を強化しているが、共産主義への信仰を欠いた「迷信活動」も攻撃の対象に加えたことになる。迷信活動の詳細は公表されていないが、中国紙は、龔清概については、風水に随った都市建設や自らをイメージした舵を取る船乗りの巨大な像を作ったことを、白雪山は、風水の占いで噴水を3回も作り替え、政府庁舎前の広場に巨大な青銅の鼎を作らせた行為を指摘している。

腐敗官僚は三代でも使い切れない蓄財を重ねたところで、心の安静は保たれない。悪事の発覚を恐れ、飽くなき権力欲にかられ、ますます不安に陥る。金持ちほど海外移民が増える現在の中国は異常である。共産主義への信仰はとうの昔に忘れ、行き着いた先が「迷信」だ。

だが無神論にたつ共産党政権は、伝統

的な民間宗教までも迷信として排除する傾向を持つ。文化大革命期は、あらゆる宗教が「迷信」のレッテルによって排撃された。改革開放後、急速な経済成長で拝金主義が蔓延する中、道徳の荒廃が信仰の危機を生み、宗教の復活を促している。企業家が風水に頼ってビルを建てるケースも多い。

「迷信」の規律違反事件は、党の危機的状况を物語ると同時に、信仰不在の社会をも象徴している。農村の荒廃と通底しているのである。

冒頭に述べた「習近平現象」に話を戻す。

信仰不在の時代に習近平が登場し、拝金主義を批判して腐敗官僚を容赦なく摘発し、食べ残しをしない運動を呼びかけて贅沢を戒め、一方で頻繁に農村を訪れ毛沢東以来の大衆重視路線をアピールしている。国民を団結させる信仰の対象として掲げるスローガンが、中華民族の偉大な復興を実現する「中国の夢」である。江沢民、胡錦濤時代は愛国主義教育を強調したが、その結果、大規模な反日デモに代表されるように過剰なナショナリズムの弊害を生み、社会の不安定化につながった。一時の激情は信仰を支えるどころ

か、妨げることに気付いたのである。習近平は2014年7月7日の盧溝橋事件記念日に、「殷憂啓聖 多難興邦」と古典を引用して国民に奮起を促した。「思い悩むことによって人は成長するのであり、国も多難であればそれだけ振興する」との意味だ。被害者感情を土台とする「反日」を乗り越え、戦勝国にふさわしい強者の意識を持つよう訴えた。

過去の戦争記念は、日本軍の残虐さを強調し、被害者意識に訴えて国民の奮起を促すことに主眼が置かれた。だが大國化とともに強者の立場が強調されている。9月3日の抗日戦争勝利記念で初の軍事パレードを行い、同記念式典に安倍首相を招待したことに戦勝国としての強さの誇示が含まれている。

日本メディアの多くが「反日」評した軍事パレードは、逆に被害者感情をバネとする「反日」を乗り越え、戦勝国にふさわしい強者の意識、つまり「克日」「超日」を訴えたと言っべきである。「中国の夢」は、弱者、被害者の劣等感を乗り越え、大國、強國の自信につなげようとする意図が明白に表れている。

国際経済学者のアンガス・マディソン氏の世界経済長期統計によると、中国のGDPは、1820年代は世界の32・9

%だったが、建国当初の1952年は5・2%に後退した。眠れる獅子と評された大國を目覚めさせるのが習近平の掲げる「中国の夢」だ。大國、強國の歴史から信仰の糧を得ようとしているのである。

「習近平現象」を読み解くには、「紅」と「黄」のキーワードを念頭に置くとかかりやすい。

「紅」は旧ソ連から受け継いだ社会主義革命を象徴する。習近平は、毛沢東とともに革命から建國の事業にかかわった習仲勲元副首相を父親に持ち、革命幹部の二代目として「紅二代」と呼ばれる。伝統的に血統を重んじる中国社会において、紅二代はトップエリート集団を構成する。政治思想の差異や人間関係の不和はあっても、濃淡の違いこそあれ「親の築いた財産を失うわけにはゆかない」という共通のDNAを持っている。

「親の築いた財産」とは共産党が打ち立てた中華人民共和国であり、その國を率いて世界第2位の経済大國に育て上げた一党独裁体制だ。党支配の正統性は中国憲法前文にある「毛沢東主席をリーダーとする共産党の指導によって帝國主義、封建主義と官僚資本主義による統治を打倒し、中華人民共和國を建國した。この

時から、中国人民は国家権力を掌握し、国家の主人公になった」ことに求められている。

紅二代は毛沢東を批判することはあっても、否定はできない。毛沢東の否定は自らの存在を否定することになる。天安門の壁面に掲げられた毛沢東像が降ろされることはない。

紅二代は、革命家族のエリート意識に支えられた国に対する強い責任感と、その裏返しとして、国が傾くことへの強い危機感を共有している。特に、歴代王朝が滅んだ共通の主因である政権の腐敗については、「このままでは党も国も滅ぶ」と強い危機感を抱いている。

腐敗のほか、公平、平等を掲げる社会主義の理想とは裏腹な貧富の格差、都市と農村の格差など深刻な難題を抱える中、習近平は紅一代として党の原点回帰を図っている。毛沢東スタイルに真似ているのもそのためだ。

次に「黄」は「黄土」「黄河文明」だ。伝統文化であり、農村重視を意味する。習近平世代は文化大革命期、都市の学生に肉体労働を経験させる下放政策によって農村生活を経験している。彼らは知識青年、略して「知青」と呼ばれ、強い世

代意識を共有している。

共産党は地主の土地を小作農に分配する土地改革を通じて農民を組織化し、農村に拠点を築きながら、都市を基盤とする国民党を包囲する形で政権を奪取した。したがって指導者の大半は農民出身であり、紅二代の知青にとっては親たちの育った環境を追体験する機会となった。

習近平は15歳の時、陝西省の延安市梁家河村に送られた。父・習仲勲の故郷である同省富平県からは北東へ350^{キロ}。乾燥した黄土高原の山あいへばかりつくように広がる村だ。習近平は幅2^{メートル}、高さ3^{メートル}の横穴を掘った「ヤオトン（窯洞）」と呼ばれる地元特有の横穴式住居で7年間、同世代の農民と同居した。習仲勲がかつて地元党幹部として執務した場所も、妻の斉心と結婚式を挙げたのもヤオトンだった。

習近平が2003年、書いた文章のタイトルは「私は黄土の子だ」。その中で、寝床のノミと雑穀の食事、過酷な農作業と初めての経験ばかりだったが、「農民の勤勉で、辛抱強い精神を学び、素朴で質素な人品に影響を受けた」と振り返った。習仲勲は生前、「私は農民の子」が口癖だったが、習近平は知青の経験を通じて「農民の子」である父への思慕を強めた。

習仲勲は陝西省富平県の貧しい農家に生まれた。習家は清朝末、自然災害と悪政に見舞われた河南省南陽の住まいを捨て、黄河の流れをさかのぼるように西に逃れて富平県にたどり着いた。習仲勲の祖父、習近平によっては曾祖父の代である。黄河文明発祥の地とされる黄河中下流域では、農民が自然に翻弄される歴史が繰り返されてきた。習家は、過酷な自然と圧政に苦しめられてきた農民の記憶を受け継いでいる。

習近平は「紅」と「黄」の中に信仰の回復を託しているのだ。
(2016年6月16日・アジア研究懇談会)

講師略歴（かとう たかのり）

北京に語学留学の後、読売新聞入社。東京社会部などを経て、2005年7月以降、上海支局長、中国総局長を歴任、13年9月から社内初の中国在住編集委員を務めたのち、15年6月「自己の信念に従って」退社。

主な著書に、『習近平の政治思想―「紅」と「黄」の伝統』（15年、文芸春秋社）、『習近平暗殺計画スクープはなぜ潰されたか』（16年、文芸春秋社）